



山登如

2021年度 付中通信第8号

コロナ禍の楽学その1

2021.9.6 (月) 高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

今になって振り返ると、コロナ禍がこんなに長引くとは想像できませんでした。臨時休校が初めて要請された18か月前と比べると、学校教育は本当に大きく変わったと思います。それをまとめると、次の三点に集約できそうです。

1. 三密回避を図るために 校内生活や教育活動にいろいろな配慮を要し、生徒ののびのびとした活動が制限されたこと。
2. クラブ活動や学校行事(特に修学旅行など校外活動を基本とするもの)が制限、あるいは中止を余儀なくされ、授業を補っていた生徒の経験値を高める活動が縮減されたこと。
3. コロナ禍の学習活動支援を動機にして、校内のICT機器整備や生徒一人一台タブレットの配備が一気に進み、学校教育における教育方法の技術革新が他の先進国並みになったこと。

以上3点に関して、本校がどのような抵抗?または利活用を試みてきたか、そして今後どのような突破口を開こうと考えているか、思いつくままに記します。

まず、1の状況下で、私が生徒諸君に奨励したのは、読書活動です。コロナ禍でも読書は何ら影響を受けることはありません。読書によって過去にも未来にも、そして世界中どこにも行けるし、誰にでも出会うことができます。読書量が不足していると昨今言われがちですが、この不自由な環境だからこそ、読書好きな生徒を育てることができるとも言えます。人生を励ます読書体験は同時に、読む量



Skype アプリを使った海外姉妹校との交流授業 (中学1年生)

が格段に増した共通テスト対策としても有効です。

今のところ、授業の進度等に遅れはないものの、アクティブラーニングによる授業改善は停滞したままですから、目先の学業成績にすぐには現れないかもしれませんが、本当の学力に対する弊害はいつか感じる 때가来ると覚悟しています。(次号に続く)